

歌誌 黄雞「春号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 回顧詠（東北忌十年）

春うらら蕎麦を求めて山あいへ古民家受継ぐ百年の味

新緑の木々の間に水平環声も失くして暫し見入らん

暑気払い主菜をしのぐ逸品の山並み街並み斜光に映えて

我が声が街に流れて面映ゆしラジオのトーク人をもつなぐ

雪の花ひらひらと舞う薄ら日に~~緑~~瞼閉じれば花はらはらと

首こりと言われて気付く己が齡彼岸の父をすでに越えたり

雪まじる春の嵐に佇める街並の一軒いま主なく

寂光に枯れ色の増す冬もみじ木枯らしに耐え揺れて競えり

「お名前は」問う受付に「お名前は」耳語で囁く付き添う娘

回顧詠（東北忌十年） 六首

はじめてのブラックアウト増す恐怖さらに追いつ車のラジオ

復帰した映像目にして言葉無し「Hell on earth」この世の地獄

ふたたびのブラックアウト真夜中に心にゆとりか被災地想う

便利さも慣れてしまえば当たり前大震災で見直す機会

海外のメディアが伝える高潔さ限度もあるよとひとり呟く

懐かしきつましき日々よみがえり計画停電これもまた良し